

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 井上暁子

本論文は、国境線が何度も引き直され、民族・文化・言語の混成が進むドイツ/ポーランド国境地帯がいかに関文学作品において表象され得るか、という問いを、社会主義末期にポーランドから西ドイツに移住した五人の作家の文学を通して論じたものである。体制転換に伴う社会的文化的環境の変化は、五人の作家のテーマ・題材・手法に変化をもたらしたが、特に彼らの作品における「一人称体の語り」を分析することによって、彼らが既存のディスコースをいかに戦略的に脱臼させ異化しているかを明らかにした。

本論文は二部から構成され、序論、結論、参考文献表を含み、原稿用紙換算 726 枚となっている。内容は以下のとおりである。

第一部は、「ポーランド亡命文学とドイツ」と題され、1980 年代に西ドイツに移住した作家たちの創作活動が、どのような歴史的社会的条件の下にあったのかを明らかにした。第 1 章では、ドイツ連邦共和国内のポーランド人コミュニティが形成された歴史・社会学的背景と、ポーランド語による文化活動の発展経緯を概観した上で、1980 年代に移住した作家たちが、かつての亡命文学では描かれることのなかった稼働移民の暮らしやドイツ系帰還者の抱える複雑なアイデンティティを題材に創作し、伝統的な「亡命」のトポスとは別のトポスを形成したことを示した。第 2 章では、1990 年代にドイツで出版されたポーランド語文芸誌 *Bundesstraße 1* を例に、体制転換後もドイツにとどまった若手作家が、彼らの出版環境の変化や、ポーランド語文学のパラダイム転換に対してどのように反応したかを論じた。第 3 章では、2000 年にベルリンに設立された「ポーランド人失敗者クラブ」を例に、ポーランド移民の新しい文化活動に見られる戦略性について論じた。彼らは、ドイツ社会に普及するポーランド人のネガティブなステレオタイプを自己定義に用い、ポーランド文化における神話化されたトポスを相対化したのだが、これは、既存のディスコースをずらし、異化する行為に他ならないことを明らかにした。

「一人称体の語りによる地域の表象」と題された第二部では、場所・地域がポーランド北部/西部国境地帯に生まれた五人の作家の文学の中でいかに表象されるかを、「一人称体の語り」に着目して論じた。第 1 章では、「一人称体の語り」が、1980 年代に書かれたポーランド語を母語とするドイツ系帰還者のアイデンティティ・クライシスを描いたザウスキや、西ドイツの裏社会で根無し草として生きるポーランド移民の絶望的日々を描いたルドニツキの短編において、既に移民の単線的な身の上話にとどまらぬ、豊かなパフォーマンス性に満ちていた点を明らかにした。第 2 章から第 5 章では、彼らが「移民」という狭義の自画像と距離をとった 1990 年代以降の作品を取り上げ、4 人の作家の「一人称体の語り」に注目した。彼らは、「放浪者」(ルドニツキ)、「原郷喪失者」(ニジェヴェンダ)、「旅行者」

(ゲルケ)、「地球外生物」(ムッシュェル)のまなざしによって、国家、地域、歴史、民族的文化的アイデンティティをめぐる様々なディスクールの裏をかき、それらを自己定義や表現に利用したり、脱臼させたりしている。ここでは、そうした語りによって、彼らが場所や地域の像を自らの手で結び直そうとしていることを明らかにした。

「語りの断層」という本研究のタイトルには、二つの意味がある。一つは、彼らが語りの行為主体であり、その独特な表現活動によって、支配的なディスクールにずれ(断層)を生じさせていることであり、もう一つは、支配的ディスクールの「ずらし」「屈折」「異化」を抜きには描くことのできない地域像があることを表している。

以上が概要であるが、本論文の主たる功績は以下の点にまとめられる。

まず、本論文が、地域文化研究における文学研究の可能性を示す好例となっている点である。本論文で取り上げられた五人の作家の作品は、従来、「亡命というトポスの脱神話化」、「ポストモダニズム」など、創作の手法や美的要素にのみ焦点が絞られ関心を持たれていたが、本論文は、これらの作家の生活形態および文学が、民族・文化・言語の混成が進んだポーランド北部/西部国境地帯の歴史に深く根ざしているものであることを認め、それをドイツ/ポーランドにまたがる地域の文化という文脈で論じる初めての果敢な試みである。

次に、選ばれた五人の作家は、いずれも個性豊かな読み応えのある文学世界をもつ作家たちであり、一人の作家を扱うだけでも大変な労力を要求されるものである。しかも、作家たちはポーランド語で書く者とドイツ語で書く者がおり、作家論などの先行研究も、当然、両言語で書かれたものが含まれるため、両言語に精通している筆者でなければ到底扱いかねる対象である。さらに、それぞれの作家の作品世界から、最も特徴的な「わたし語り」の部分の的確に選び出し、それらがいかに戦略的に既存のディスクールに「断層」をもたらし、そのことによってポーランド/ドイツの国境地帯という特殊な地域を巧みに表象し得るかを鮮やかに読み解くことに成功した。

他方、審査では、次のような問題点・要望が指摘された。文学研究には、論証的なものと記述的なものがあるが、井上氏の論文は、ドイツの比較文学研究者アモデオが移民のコミュニケーションおよび生活形態について提唱した方法論に基づいているように思われる。つまり、論証的な道を選んだはずなのに、第二部の作品分析は、論証よりも記述が優先されている。論証的であるにしては、結論部分が若干弱い。

タイトルにもあるように、本論文において「語り」は重要な概念である。「語り」/ナラティブは、文学研究において長い歴史を持ち、また近年も深められているが、「語り」/ナラティブの基本的な理論についての言及、考察がもっとなされるべきであった。

しかし、これらはいずれも本論文全体としての質の高さを本質的に損なうものではない。本論文がこの領域において大いなる貢献を果たしたことは間違いないと判断される。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士(学術)を授与するにふさわしいものと認定した。